

6 六道の堤 (ろくどうのつつみ)

所 在:伊那市美篤笠原 貯水量:42,000トン 受益面積:約34ヘクタール

築 造:嘉永元年(1848年)

管理者:伊那市美篤土地改良区

嘉永元年(1848)高遠藩主、内藤頼寧(ないとうよりやす)は六道原の開墾を行いました。計画は野笹村(現在伊那市高遠町長藤)の藤沢川から取水し、鉾持棧道(ほこじさんどう)脇をトンネルで通過させ、芦沢に出て笠原を通り、六道原に至る約10kmの新しい水路を造るものでした。同年3月に着工し、わずか半年で完成しました。当初は六道の堤の建設予定はなく、工事中に上大島の名主、利右衛門等から六道原開発の要求が出され、それが六道の堤の建設、ひいては末広村(現在の美篤末広)の開発に繋がりました。工事は嘉永2年に始まり、同4年9月に完成。末広の名は、頼寧が命名したといわれています。「まほらいな いいとこ 百選」に認定されています。

堤には、漂白の歌人と言われた井上井月いのうえせいげつが六道の堤を詠んだ「どこやらに鶴たずの声聞く霞かな」の句碑があります。

